龍南會雜誌第百三十七號

高文學校印書

論說

清朝康熙乾隆の文運

第五回第六回雜誌部委員　飯田龍泉

遼金の末造に當り、長白山の東、布庫里山の麓に起れる愛新覺羅氏は、肇祖より數世を經て、太祖に至りて頻に兵を中原に用ひたりしが、太宗に及ひて國號を大清と改め、聖祖に至りて四百餘州を統一し、海内悉く辮髮の俗と化し、靡然として乾隆朝の正朔を奉するに至りぬ。唯、軍事上の優勝者たり、政治上の主權者たる滿州政府も、文化の上に於ては、全然漢族の教を受くべく其の脚下に跪かざるを得ざりき。こは獨り滿州朝のみならず、古今東西、武力を以て文弱の開化人を壓倒したる蠻族か、統治の局に當る劈頭に於て、常に繰返したる史上の事實にして、是非もなき次第といふべし。聖祖乾隆帝は先つ鋭意漢族文化の吸收に勉めたりき。彼は明朝の遺臣にして、苟も一藝一能の士は、漏す所なく網羅して朝に列せむとせり。或者は氣節を負ふて隱れ出でざりしといへども、多くは新朝の謳歌者となりぬ。貳臣傳一卷、繙き來らば、思半に過くるものあらむ。聖祖は此等に對して爵祿の賜を豐にし、優遇の禮を渥くし、感激發奮、その能を盡し、その才を揮はしめたり。或は史館に入れて編述に從はしめ、或は臺閣に招きて翰墨を掌らしむる等、あらゆる手段を以て野に遺賢なからしめたり。これ一面には、處士横議して新政に喙を容るゝを防遏する拑口策、はた反

抗敵愾の氣勢を鎭むる懷柔策なると同時に、郁郁たる文治を飾りて、盛世の美を誇り、左衽偏武の蠻族を府なりとの誇を免れむとするにありしことを知るべし。特に幾多浩瀚なる編纂の業を企て、學者文士輩の精力を之に傾注せしめ、嘗て意を他に轉するの餘裕なからしめたるが如き、以て這邊の消息を窺ふに足る。明史は斯の如くして編せられぬ。康熙字典は斯の如くして成りぬ。此等の事業は其因こゝに存したるも、其果は一代の學風に至大の影響を與へぬ。

宋明以來、朱、陸、王か稱道せる心性理氣の說は、漸く空疎浮誇に流れ、聖經賢傳中の名物度數に就ての研究を忽にしたるかため、兎角、牽强附會に陷り、頗る枉撲孟浪をきはめしかば、明末より之に對する反動起りて、博證精査、實事を求むる考證の學風勃興しぬ。清初に至りては、顧亭林、李二曲、黃黎州、閻潛邱等の大家彬々輩出して、斯道の標識となり、天下を風靡せり。一代の風氣既に翕然之に向へるに際し、時の政府か幾多の大編纂を企て、一時の碩學鴻儒を登用し、恰も渠等か得意とせる博引旁搜の能と、爬羅扶揚の術を十分に發揮せしめたれば、皆無前の成功を告くるを得たるを外にして、益々時代の好尙を助長したる狀、炎々たる猛火に燥萩枯柴を加へたるか如し。其烈烟噴騰して焦天の壯觀を呈せる、偶然にあらざる也。康熙の遺圖を紹ける乾隆朝は、また四庫全書提要、大清會典、大清一統誌等の大編述に從事しぬ。かく清初の帝王か學術藝文を奬勵せるは、一面一種の政略に出てしか如きも、又一面に於て渠等か此方面に對して、多大の個人的趣味を有せしことを拒むへからす。吾人は渠等か遺せる御製詩文集を觀て、其事實を確むるもの也。聖祖康熙帝には、御製文一百七十六卷ありて、前後共に四集に分てり。世宗雍正帝には、御製文集三十卷あり、文二十卷、詩十卷より成る。高宗乾隆帝に至りては、樂善堂文集定本三十卷、御製文初集三十卷、二集

四十四卷、詩集三百七十二卷あり。其內容は兎も角、卷帙の繁富、歷代帝王嘗て之か匹儔を見さる所、『猶培瓌之望華嵩』といふ、强ち浮言にあらさる也。畢竟、渠等か熱心なる文藝保護者たりしと同時に、好文能詞の人主たりしは明瞭也。

清朝三百年、世を經ること七代、久しからずとせず。而して其開奎運隆隆、眞に文學の黃金時代を推すべきは、康熙、乾隆の二期となす。孰れも六十年の長治世に亘り、好文の英主上にありて鼓舞振勵に勉めたれば、文人詩客、雲蒸霞鬱して一代の風氣を醞釀し、坫壇に時ならぬ花開けり。

作家の輩出、詞彩の炳煥、孰れをそれと軒輊しがたき程の盛運なれども、兩期の特色、自から同じからざるものあり。想ふに清朝に康熙、乾隆の二期ある、なほ我德川文學に、前元祿あり、後に文化文政あるが如きか。元祿の豪華が化政の洒脫ど風尙を異にするものあるを知らば、創業の康熙と、守成の乾隆との間に。幾多區別すべき差異の存在を忘るべからず。清朝二期の間が、元祿と化政ほとに隔り居らざるが爲に、それ程に著しくは感せられざれども、確に同一視する能はさるものあるを見る也。

試に其大要を擧げむか、康熙朝には明代の遺臣多く、風骨嶒崚、周の粟を食むを潔しとせずして、隱遁世を終へたる魏叔子の如きあり。新朝の禮遇に浴しながら、跼天蹐地、中心自ら怛惻たる吳梅村の如きあり。興國の隆運に乘して卓厲風發、清新の氣を鼓蕩せる王漁洋の如きあり。亡國の音あり、昇平の象あり、鼙鼓の響あり、颯颯の聲あり、不平の鳴あり、故に其の發して文辭となるや、千種萬別、多趣多樣の觀あり。乾隆朝に至りては、泰平の形勢、既に定りて、世間の事物秩序に就きたれば、當時輩出の人物にも、自ら太平の民たる典型備はれり。乾隆三家、趙歐北、袁隨園、蔣藏園の如き、詞風學統に各々差異なきにあらざれども、

性格は皆通して才人の資あり。故にその觚を操るや。直に心血を攄べて文章をなすにあらで、雕心鏤骨に憂身を窶す傾あり。身世遭遇を回想して、俯仰咏嘆するにあらで、博を衒ひ異を立てゝ、翰墨を弄する傾あり。概して之を評せむか、康熙文學の多趣多樣に反對して、乾隆文學は稍々單調にして、千篇一律の謗あり。前者に於ての清新は、後者に於てはやゝ爛熟に陷れり、蒼勁は綺靡に變し、雅麗は纖巧と化したるか如し。遞莫、兩期とりゞの長所あれば、未た二三の點を捉へて、俄に甲を揚げ乙を貶すべきにあらず、共に清朝文學通有の特色と、流弊とを備ふる勿論なり。

（右清朝文學史總論中の一節）

逝ける北歐の巨人

（BJÖRNSTJERNE, BJORNSON.）

水郷

（一）

今年四月二十六日の夜、諸威の首府クリスチヤニアの外務省では、議會の關係者を招待して、大晩餐會か開かれた。國王も臨席された。各大臣も出席した。花のような千百の燈光は、嘻々として響く談笑の聲を照らし、泡立つ歡樂の盃を照して、更くるに從つて益々濃やかな影を落す。丁度雪が消にて待ち憬れた春が來た諸威國民の喜びを、此一堂に集めたかと思はれた。

折しも午前零時三十分、二通の電報は外相の手に渡された。外相は密かに開いて、やがてそつと王に囁く。